

はしがき

本書は、機械産業における生産財分野の技術発展戦略の検討を通じて、中国の工業化における現段階のあり方を明らかにしようとしたものである。

2000年代の中国は、WTO加盟後の新しい工業化段階を迎え、かつて自らが工業化モデルとしたアジア NIEs を超え、技術競争力では先発の ASEAN 諸国を上回り、高付加価値製品の製造・輸出を実現し、世界の工場に成長した。このような著しいキャッチアップは、中国の工業化発展として世界から注目を集めた。中国の工業化における独自性については、これまで多くの示唆的な議論がなされ、マクロレベルの研究のみならず、産業・企業そして製品・工程に至るミクロレベルの研究も展開されてきた。

これまでの中国機械産業に関する技術発展の議論は、主として電機・電子や自動車などの消費財分野に集中しているが、本書では生産財分野に注目し、機械産業の4分野の1つである一般機械産業を研究対象とする。特に、一般機械産業の主要業種である、工作機械、建設機械、および農業機械を取り上げる。工作機械は工業化社会における不可欠な労働手段であり、現代モノづくりの基本である。建設機械は港湾・道路・橋梁のようなインフラや住宅などを建造するための設備であり、経済発展や都市化建設において大きな役割を果たすものである。そして、農業機械は農作業や農産物加工の効率を高める欠かせない道具であり、中国の14億人口の食料問題を解決する決め手でもある。

以上のように、一般機械産業は工業化社会の最も重要な基盤産業の1つであるが、日本では中国の一般機械産業だけを取り扱う専門書がほとんど見られないのが実情である。その点からも本書発行の学問的意義は大きいと考える。

中国は工業化の後発国であるがゆえに、必然的にキャッチアップ型工業化の道を探らざるを得ない。建国後の1950年代から改革開放が始まる1980年代まで、工業化を促進するために一般機械分野を含め数回の大規模な技術導入を行った。また、市場経済を導入した1990年代から今日に至るまで、急速な外資導入で外国企業の対中技術移転を加速させた。結果、産業技術全般が大いなる発展を遂げた。2000年代のWTO加盟を契機に、外国企業の買収を通して技

術を獲得する中国企業も現れている。

本書では、中国経済のグローバル化による技術発展戦略の変化を考察すると共に、一般機械産業の3分野における技術発展の課題、工業化の担い手に関する発展状況、および中国の工業化における現段階の特徴を解明した。

現在、中国発の多国籍企業が増えており、これまでの技術導入とは逆に、海外への技術移転が行われている。また、アフリカなどの発展途上国に対する技術支援を行うなど、計20カ国に教育機関「魯班工場」を次々と設立し、インフラ開発に必要な工学の技術や知識の対外教育に力を入れ始めている。これまでに、現地企業と協力して既に12,000人に職業訓練を実施したと報じられている(共同通信)。このことは、中国は諸先進国からの対中投資・技術移転や日本からのODAなどを受けて急速な発展を実現してきたが、今や他の途上国を支援する立場へと変化したことがうかがえる。

本書は筆者にとって初めての単著であり、本書の出版までに多くの方々のご指導とご教示を賜った。まず、本書の出版に際して、「岐阜協立大学研究叢書」の出版助成が与えられた。この場を借りて厚くお礼申し上げたい。

筆者の研究者としての道程においては、大学院生時代の先生をはじめ多くの方々のお世話になった。大学院時代の恩師である安藤哲生先生は、大学院修了後も絶えずご指導くださり、安藤先生の存在がなければ、これまでの研究を続けることは出来なかったであろう。改めて心からお礼を申し上げたい。

また、兵藤友博先生、田中彰夫先生、長島修先生、渡辺峻先生、橋本輝彦先生、仲田正機先生、今田治先生など、立命館大学大学院経営学研究科の諸先生からは、研究会などを通じて経営学の幅広い分野にわたる研究成果を学ぶ機会を与えていただき、多くの示唆をいただいた。

一方、学部時代の恩師である平井東幸先生は、大学を退任された後も筆者に多くのご指導とご教示をくださり、多面的なご支援をいただいた。改めて感謝申し上げたい。

大学教員になってからは、立命館大学国際関係学部の中川涼司先生をはじめ、科研費研究グループのメンバーや、同大学経営学部の陳晋先生、守政毅先生から研究会での発表や共同研究の機会をいただいた。

加入学会では、アジア経営学会の夏目啓二先生(龍谷大学名誉教授)、肥塚浩

先生（立命館大学大学院経営管理研究科教授）、日本国際経済学会の田中祐二先生（立命館大学経済学部教授）、中本悟先生（立命館大学経済学部教授）、中国経済経営学会の渡邊真理子先生（学習院大学教授）、苑志佳先生（立正大学教授）の諸先生に、研究会などでご教示賜っている。

また、Lee 凧子先生（元立命館大学教授）、故・加藤由紀子先生（元岐阜経済大学教授）、山崎かな先生（岐阜協立大学講師）は、筆者の留学生時代はもとより、その後も日本語のご指導をいただいた。

さらに、前職場である京都創成大学（現福知山公立大学）では、初代学長の二場邦彦先生、故・森野勝好先生をはじめ、多くの先生方にお世話になった。特に、二場先生には仕事だけでなく、生活面でも大変お世話になった。心からお礼申し上げたい。現職場の岐阜協立大学でも、上司・同僚からたいへんお世話になっている。感謝申し上げたい。

最後に、出版事情の厳しい中で本書の発行を快くお引き受けくださった法律文化社様および畑光取締役社長にお礼を申し上げたい。

私事ながら、日々の仕事に追われがちな筆者を絶えず励ましてくれた妻貴子、日本留学から研究者になるまでずっと支えてくれた両親に心から感謝申し上げます。

2024年2月

韓 金江